

## マルクス経済学の方法をめぐる二、三の文献と問題

大野 精 三 郎

### I

最近までのMarx批判は、多かれ少かれ、方法の問題に歸着するように思われる。批判の根本は、Marx學説においては、思辨Spekulationと現實Wirklichkeitとのあいだが截然と區別さるべきであり、Marx學説の方法は思辨的であることを指摘することによって、その學説の崩壊を結論づけている。このような傾向は、Marxの學説全體を批判するばかりにも、またMarxの學説の一貫性を批判するばかりにもみられる。たとえば、あとの批判には、古くはHammacher、新たしくはGrossmannのように『経済学批判序説』*Einleitung zur Kritik der politischen Ökonomie*で述べられたMarxの方法またはプランはその後變更され思辨的となったという批判が数えられるであろうし、また、まえの批判にはSchumpeterによってよそおい新たに登場し、近代経済学の立場からするもっとも包括的かつ全面的な批判が考えられるであろう。この二つの批判に共通することは、批判者がHegel辯證法とMarxの唯物辯證法とを區別せず、一括して思辨的であると批判している点である。したがってこのような批判に答えて、Marx経済学の方法を明らかにする課題は、二重に遂行されなければならない。すなわち、ひとつにはHegel辯證法とMarx唯物辯證法とのちがい、あるいは、MarxがHegel辯證法を批判・克服して自己のそれを唯物辯證法として確立していった過程を明らかにしながら、他方においてSchumpeter以下の下した批判に答えるものでなければならない。1951年に刊行されたOtto Morfの『Karl Marxにおける経済理論と経済史との関係』*Wirtschaftstheorie und Wirtschaftsgeschichte bei Karl Marx. Bern 1951.*<sup>1)</sup>は正面からこの課題を果そうとするものにほか

ならなかったし、Fritz Behrensの『政治経済学の方法』*Zur Methode der politischen Ökonomie. Berlin, 1952.*も、この分野での問題提起とみうるであろうし、多少古いがKonrad Bekkerの『マルクスの哲学的發展、ヘーゲルとの關係』*Marx's philosophische Entwicklung sein Verhältnis zu Hegel. Zürich New York 1940.*もMorfとの関連において見落すことのできない書物であると思う。わたくしは、ここではMorfの書物を中心としながら、この課題が現在どのような形で遂行されつつあるかを明らかにしようと思う。

まずMarx経済学の方法についての包括的・全面的批判者として、SchumpeterのMarx批判をとりあげ、問題の所在を示そう。

Morfによれば、SchumpeterのMarx批判はつぎのように要約される。Schumpeterの批判の核心は、Marxの経済学的貢献は、事實観察と分析とのみに負うのであって、Hegelから継受した辯證法とはまったく関係なく成立したところにある<sup>2)</sup>(この觀點は、Edward Bernsteinが『社会主義の諸前提』*Die Voraussetzung des Sozialismus. Stuttgart 1899.* S. 26. 金原賢之助譯 p. 48において、辯證法の《陥穽》について語って以来、Marx批判の全文獻をつらぬいている。) ついで、SchumpeterはMarxの著作を社会学的部分と経済学的部分とにわけ、前者は経済史觀 *Ökonomische Geschichtsauffassung*のうゑに構成され、後者においては細目研究 *Detailforschung*が發言をゆるされており、二つの要素は獨立的に成立し、内的な不一致を示していると批判する。<sup>3)</sup> すなわち唯物史觀はいわば作業假設を構成するにすぎず、経済学における詳細研究は事實観察と分析とに基礎をおく、それ自身獨立的な部分を構成する(この批判はTugan-Baranowskyがすでに1905年に、『マルクス

1) この書物については外國では二つの簡単な紹介・批評がでてゐる。ひとつは、Heinrich Poritzの *Kyclos. Vol. V FASC. 3. 1952.* 他のひとつはBaranの *The Journal of political Economy Vol. lxi No. 1, 1953.* である。わが國では、木本幸造氏によって紹介・批判された(経済学雑誌・第32卷第5・6號, 1955.)。なお部分的には、佐藤金三郎氏『經

济学批判體系と資本論』(経済学雑誌第31卷第5・6號, 1954)に引用されている。木本氏の批判はやや超越的であるように思われる。

2) *Epochen der Dogmen-und Methoden Geschichte, in: Grundriss der Sozialökonomik, I. Abt., Tübingen 1914. S. 81.* 中山伊知郎・東畑精一譯, p. 203.

3) *Epochen...S. 81.* 邦訳 p. 203.

主義の理論的基礎』*Theoretische Grundlagen des Marxismus*の序文のなかで明らかにしたところである。すなわち『Marx 主義の体系が社会政策の体系でないかぎり、そのなかで、抽象的・社会的経済理論と資本主義の具体的歴史的發展傾向の研究とは區別されなければならない。その体系のそれぞれの部分は、原理的にことなる性格をもっている』。以上の二つの観点からする Schumpeter の Marx 批判は、Marx 学説のまもつていゝる《哲學的衣裳》<sup>4)</sup>は細目研究にたいして重要でないということ、すなわち形而上學的前提としてあらわれる方法は、科學的作業の結果にははいつてこないということである。しかし Schumpeter がさらに進んで、分析の妥當性にとっては、事實觀察だけでは充分でなく、ヴィジョンの光が理論の結果を訂正する可能性をあたえているというばあいには、積極的に Marx の経済学の方法が理論の成果に影響をおよぼし、しかもその方法が主観的であると批判することを意味する。すなわちヴィジョンは Marx 学説における中間項をなしているが、それは一方では消極的に《弱點のあらわれ》として思辨と結びつき、他方では積極的に理論の基礎として細目研究に結びつけられているといふことができるであろう。かくてマルクスの体系の中心的部分である、實證的・細目科學的部分、事實觀察および分析も崩壊せざるをえない。けだし、それらすべてがヴィジョンという主観的要素に補足され、支えられているからである。だから Schumpeter によれば『いままで提示された大抵の議論は、——Marx 的方向も、一層通俗的な諸方向とともに——誤っている』という結論が生ずる<sup>5)</sup>。また科學という観点からは議論は分析なくしてなにものでもないから Marx の全学説のなかでは、ただ、資本主義は社会主義に交替するという《豫言者の側面》が残るだけである。しかし『豫言』は科學ではない。

## II

以上のような Marx 批判に答えるためには、Marx の諸著作を内在的にあとづけて、その経済学の方法を明らかにしなければならない。というのは、Marx は獨立的な著作として方法論を残さなかったからである。Marx の著作を年代順に追いつながら、そのなかから Hegel を克服し、経済学の方法を確立していった過程をあとづけた Bekker とはちがつて、Morf は Marx が 1857 年

の夏に書きあげて、自己の経済学研究の手引きとした『経済学批判序説 *Einleitung zur Kritik der politischen Ökonomie*』<sup>6)</sup>のなかで展開した最初の方法論的敘述から出發する。そしてこの方法論的統一の觀點のもとに 1844 年のパリーで書かれ、1930 年に印刷・公刊された『経済学・哲學手稿 *Ökonomische-philosophische Manuskripte*, 1844』および『資本 *Das Kapital* 第一部 初版 1867 年』との關連をあとづけ、それらが方法論的に『嚴密な一貫性』(Vorwort S. 6)をもっていることを論證しようとしている。わたくしは、Marx 自身の言葉の引用をなるべく省略しながら、Morf の論旨を追求してみよう。

Morf は『序説』の第三節『経済学の方法』のなかの『單純な範疇から全體に上向する學問的に正しい方法』をとりあげ、ここに Marx と Hegel との區別を明らかにする。すなわち、このような過程を概念の自主的展開と考える Hegel にたいして、Marx はこの方法を、『具體的なものをわがものとするための、具體的なものをひとつの精神的具體的なものとして再生産するための思惟にとつての様式にすぎない。だが、それはけっして具體的なもの自體の成立過程ではない』(*Grundrisse*, S. 22. マルクス=レーニン主義研究所譯(國民文庫版) p. 295.)と明示しているからである。Marx にあつてはもつとも簡單な經濟學的範疇は、『すでにあたえられている具體的な生きた全體の抽象的・一面的な關係として以外にはけっして實存しえないからである』(*Grundrisse* S. 22. 邦譯 p. 296.)かくて思惟された具體的なものは、『直觀と表象とのそとで、あるいは、それを超えて、思惟しかつ自分自身を生む概念の產物ではなく、直觀と表象との概念での加工の產物である。』したがつて Marx の方法は、Hegel のように世界の起源を概念から理解するのではない。『實在的な主體は、依然として頭腦の外部で、その自主性をもちつつ存続する。すなわち、頭腦がただ思辨的にだけ、ただ理論的にだけふるまうかぎりでは。だから理論的方法にあつてもまた、主體が、社會が、前提としてつねに表象に浮べられているからである。』(*Grundrisse*, S. 22. 邦譯 p. 296.)このような學問的に正しい方法の端緒に

6) この『序説』は、周知のように手稿にとどまり、Marx の生前には公刊されなかつた。Marx の死後 Kautsky によつて 1903 年 *Neue Zeit* 誌上に發表されその後『経済学批判』に併載される習慣になつていた。その後 Kautsky 版の誤りを正したものが 1934 年モスクワのマルクス・レーニンの研究所から公刊されたが、現在では、Marx の他の手稿とともに *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie 1857—1858*. Berlin 1953. の *Einleitung* として原文にしたがつて採録されている。

4) *Epochen*..., S. 81. 邦譯 p. 202.

5) *Kapitalism Socialism and Democracy* 3rd ed. 1950 (1st ed. 1942). p. xiv. 中山伊知郎・東畑精一 共譯(上)序文 p. 33.

おかれる単純な範疇について、Marx は経済学における根本範疇である労働についてつぎのように述べているが、そこで注意すべきことは、単純な範疇が具体的な範疇とのあいだに完全な媒介関係をもつのはほかならぬ近代資本主義においてであるという認識である。『近代的経済学がまさきにかかっているもっとも単純な抽象、すべての社会形態に妥當するきわめて古い関係を表現するもっとも単純な抽象は、じつにこの抽象においてのみ、最も近代的な社会の範疇として実践上眞實にあらわれる。』(Grundrisse, S. 25. 邦譯 p. 301.)。すなわち、『ほかならぬその抽象性のゆえに——すべての時代にたいして妥當するにもかかわらず、しかもこの當の抽象という規定性の點では、やはりまぎれもなく歴史的諸關係の産物であるということ、そしてその完全な妥當性は、ただこれらの諸關係にたいしてだけ、これらの諸關係の内部でだけだということである』(Grundrisse, S. 25. 邦譯 p. 301.)。ところで『ブルジョア社会は、もっとも發展した、また最も多様な生産の歴史的組織である。だからその諸關係を表現する諸範疇は、その仕組の理解は、同時に、没落し去ったすべての社会形態の仕組と生産諸關係への洞察を可能にする。ブルジョア社会はこれらの社会形態の殘骸と諸要素とをもってきずかれたのであって、そのうちの部分的にはまだ克服されていない遺物が餘命を保っており、ただの豫兆にすぎなかったものが完成した意義をもつものにまで發展している、等々である』(Grundrisse, S. 25—26. 邦譯 p. 302.)。だからわれわれが具体的な経済現象の觀察をおこなうとき、そこに思い浮べるのは、資本主義社会でありそれを表象して、その分析に、すなわちその仕組の理解に進む。そのときわれわれのみいだす範疇的諸規定は、この社会のものであるとともに、それに達する道程に横わるあらゆる社会形式のものである。むしろ後者の諸要素はその残りとして前者のうちに止揚されているかあるいは潜在的なものの顯在化として實現されているとみうる。この意味において、最も現代的な社会は、『最も發展せる、最も多様な』すなわち最も具体的な社会である。かくて経済学の篇別にとって決定的なことは、資本がブルジョア社会のいっさいを支配する経済力であることである。資本は『出發點となり、また終結點とならなければならない』(Grundrisse S. 27. 邦譯 p. 305.)。

このような『序説』の構造を Morf は、ここでなによりもまず、抽象的・論理的諸範疇の根本性格、すなわち『實在的・現實的範疇としての論理的諸範疇の存在論的構造(本質)』(Morf: S. 79)を明らかにしたものと見てとらえている。

## III

『経済学・哲学手稿』が問題となるのは、経済学の方法との關連においてである。『手稿』において、この關連のなかで問題となるのは、編集者 V. Adoratzki によって表題をつけられた二つの章『疎外された労働』(MEGA.7) I S. 81 邦譯マ・エ選集補卷 4 p. 496 以下)と『ヘーゲル辯證法および哲学一般の批判』(MEG. I S. 150 邦譯 p. 394 以下)である。

最初の章では(経済学的範疇ではなく)社会的範疇としての労働が觀察の中心となっている。労働一般として把握される労働を、その質的立場において、すなわち生産關係の構造から明らかにすることを目的としている。いいかえれば、抽象的一般性における労働が私有財産の構成要素としてもつ性格が問題とされるのである。諸前提を検討し、私有財産の生成過程をあらわにすることは、古典派経済学の批判をはじめめることを意味する。

古典派経済学の諸法則は労働の外面的な不變の状態にかかわりあうのみであって、労働の現實的・歴史的內容には關係せず、労働者(労働)と生産物との直接的な關係を觀察しない。この關係は労働者がその生産の對象にたいする關係であり、一方では、労働者に疎外的力として對立する對象の喪失、他方、労働者の活動の對象化として生産物におけるこの活動そのものの疎外である。この疎外された労働は人間みづからの人間の本質を疎外し、この疎外は人間同志を疎外させる。この疎外は單に経済的事態であるばかりでなく、人間の疎外であり、生活の喪失である。かくて Marx においては、労働の外在化と疎外とは、経済的關係を超えた人間の全本質の疎外の問題となるのである。すなわち労働の外在化が人間の本質の非實現化と疎外とを意味するならば、労働の本質それ自身は人間の本質の本來的表出および實現として把握されなければならない。Marx は労働を抽象的に捉えた Hegel を超えそれを物的基礎のうえに据えて明らかにする。手短かにいえば、對象的世界の生産、加工および占有において人間がみづからの現實性をみとめるかぎり、そして人間の對象にたいするかぎり、労働の本質は人間の自由の表現でなければならない。労働において人間は自由となり、労働の對象に自分自身を自由に實現する。労働において人間は自由となる。だが批判と解釋とがそこから出發する事實、すなわち労働の外在化と疎外にお

7) Marx, K., und Engels, F., *Historische Gesamtausgabe*. Berlin und Moskau 1927—1935. の略記號, 邦譯として示されるものはマルクス・エンゲルス選集の略記號

いて表現される人間の本質の外在化と疎外、したがって資本主義的現実における人間の本質の状況は、『批判』が人間の本質および労働の本質として規定したところのもの全転倒および隠蔽としてあらわれる。労働は人間の『自由な活動』『普遍的な自由な自己実現』ではなく、その奴隷化であり、非現実化である。かくて Morf の引用し、賞讃する Maurcuse<sup>8)</sup>はこのような観点から Marx における哲学が経済学および革命理論と密接不離な関係にたっていることを指摘するが、それはとにかく、労働者の労働の生産物や労働そのものが、労働者にとって疎遠なものとなっているとすれば、それは誰か他人に属しているはずである。ここから私有財産の生成・本質が明らかとされる。『私有財産は疎外された労働の、また自然および自分自身にたいする労働者の外的関係の産物であり成果であって、その必然的歸結である』(MEGA, I, 3, S. 91. 邦譯マ・エ選集補巻 4. p. 312.)。

ところで、『序説』を觀察したさいに明らかにしたことがここに完全にあてはまる。人間労働の全疎外、物化は、『現実のあらゆる種類の労働がきわめて發達した總體』の基礎のうえに、個人にとって『労働の一定種類が偶然であり、したがって無關心である』ところにおこる。このような事態はまた労働一般という論理的・歴史的範疇を生みだした地盤であった。『疎外された労働という概念は、抽象的・一般的労働の概念を前提とする。すなわち、抽象的・一般的労働の概念は、つぎのような社會的組織、すなわち客觀的にも主觀的にも疎外された形態にある労働が生産関係を支配する定有形態の一般的範疇に生成するところの社會組織の最高段階からはじめて展開することができる』(Morf: S. 42)。かくて『草稿』の課題は、『序論』においてあたえられた論理的範疇の現象形態を分析することであったことが明らかとなる。すなわち抽象的範疇が生産過程において疎外された範疇において現象することを明らかにし、その現象形態のなかに人間的諸関係をみいだすことであった。この分析の過程において Marx は疎外された労働をただ精神的労働の形態においてしか知らなかった Hegel を克服して、疎外を現実的な疎外として主體的には活動において、客體的には對象においてみづからを疎外する労働として立證した。このように労働の概念を基礎におくことによって、古典派経済学の採用した労働・資本・土地の三分法が廢棄された。しかし疎外された労働を人間の本質から解明し、その克服の仕方を述べることは『事物の行程にした

がっていないために敘述において缺點があり、發展が觀念から生ずるといふ假象が生ずる』(Morf S. 47)。かくて、事物の行程にしたがって敘述を展開する課題は『資本』に移されなければならなかった。『資本』は事物に従う敘述であるとはいえ、『疎外された労働』の背後に潛む人間的な關係の本質的諸關連をあわせ把握することを目指している。

## IV

かくてわれわれは、Morf とともに『資本』のなかに Marx 経済学の核心をみることになる。『序説』において實在的・現實的範疇としての論理的範疇が事物の本質を示すことが明らかにされた。たとえば、根本的範疇である労働は富の創造者としての労働一般として資本主義において眞の内容を獲得することを。しかしこの本質は直接には現象にあらわれない。『手稿』の分析が示したように、現實には『疎外された労働』として、富の創造の擔い手たる労働者階級の窮乏としてあらわれる。このように本質が直接に現象しないで、媒介してあらわれることを明らかにすること、これが『資本』の課題であった。マルクスもいうように、『事物の本質と現象とが直接に一致するならば、すべての科學は無用であろう』(Das Kapital. Volks-Ausgabe. 1932—34 III S. 870. 長谷部文雄譯第 11 分冊 p. 399.)。

だから、『資本』の課題は、從來の研究の總括として、「論理的・歴史的規定の過程的統一としての具體的・歴史的繼起における諸範疇。《實存と本質との闘争》の規定、具體的過程からの歴史の謎」(MEGA I, 1, 3, S. 114 邦譯マ・エ選集補巻 4 p. 341.) の理論的解決。本質と現象との統一』(Morf: S. 79.) を示すことになる。

Marx は、『資本』において特定の生産様式、すなわち歴史的な生産様式、まさに『それに照應する生産様式ならびに交易諸關係』をもつ資本主義的生産様式を研究することを明らかにし、みづからの著作をつぎのような言葉をもって總括しているが、それはうえに述べた『資本』の課題を要約的に示すものにほかならない。『…近代社會の經濟的運動法則を暴露することが、本書の窮極目的である』(K. I S. 7—8. 邦譯第 1 分冊 p. 116.)。あるいは他のところで『その社會の運動の自然法則』(K. 1, S. 7. 邦譯第 1 分冊 p. 116.)、すなわち『資本家的生産の自然法則』(K. 1, S. 6. 邦譯第 1 分冊 p. 114.) を暴露することである、と。かれが没頭したのは、社會過程の特殊性でもなければ、『社會的敵對的關係のいろいろの發展段階』でもなく、『頑強な必然性をもって作用し、かつ自己を貫徹するところのこれらの傾向』(K. I. S. 6. 邦譯第

8) Maurcuse, Dr. Herbert, "Neue Quellen zur Grundlegung des historischen Materialismus," in Die Gesellschaft II. Band 1932.

1分冊 p. 114.) としての法則そのものであった。このような課題の設定はまた、具體的なものを多くの規定の總括として、すなわち合法則性として示す『經濟學的に正しい方法の具體化』にほかならなかった。

だから、Marx が自然法則というとき、ひとは Sombart のいうように、それが自然秩序というような自然法的把握の殘存物ではなく、經濟過程が、その本質を認識しえない参加者にとっては、外的・物的過程として、すなわち、参加者の頭腦に自然必然的な合法則性をもって實現し、經濟過程が参加者に、かれの生産過程における地位に應じ、資本、市場、その他の非人間的な力としてあらわれるという事実にあることに注意しなければならない。生産關係の外的諸條件が(疎外と物化において)人間を從屬せしめるために、實際それに人間が服従するところの自然法則という概念は、特定の社會狀態を、歴史的・論理的具體物として把握することを意味するのであって、自然科学的法則のように因果的・機械的な意味において、すなわち抽象的・非歴史的な意味において把握することを指すのではない。『今日の社會は、固定的な結晶物ではなくて、變化しうるかつたえず變化の過程にある一つの有機體である』(K. I. S. 8. 邦譯 p. 116.) からである。したがって抽象的な法則概念は否定されなければならない。

作業様式もまた『序説』に照應する。「敘述の仕方は、形式的には研究の仕方と區別されなければならない」。というのは『研究は、材料を仔細にわがものとし、その種々の發展形態を分析し、そしてそれらの形態の內的紐帶をかぎださなければならぬ。この仕事が成就されたのち、はじめて現實的な運動に照應して敘述される』(K. I. S. 17 邦譯第1分冊 p. 134—5) からである。

Morf において注目すべきことは『序説』と『資本』との關連を、『序説』の第2節において述べられた經濟總過程の把握、すなわち『分配・交換・消費にたいする生産一般の關係』において述べられた辯證法からあとづけていることである。このなかに Morf は、古典派經濟學がおこなった經濟學的諸範疇の『コンヴェンショナルな把握からの移行がすでに完成されている事實』をみいだす。すなわち、それらの諸範疇の關連は『生産は一般性であり、分配と交換とは特殊性であり、消費は個別性であり、それが全體のなかで結合している』(Grundrisse S. 11. 邦譯 p. 279) といった單なる『表面的な關連』にあるのではなくして、むしろこれらの契機のあいだには『交互作用がおこなわれ、それはすべて一個の全體性の肢節』『ひとつの統一の内部での區別をなし、』しかも生産が包括的契機として作用するという關連のなかにある

ことを明らかにしているからである。そこではことなつた諸契機のあいだの關連は對象そのものの運動であるひとつの辯證法的な運動に變化しているのである。このように事物を運動における同一と差別のなかにみる《素材の辯證法》が『資本』にも貫徹していることを明らかにし、このような觀點から Morf は、Grossmann による『批判』と『資本』とのあいだに重要な方法的變化があるという批判に反批判を加えている。Grossmann<sup>9)</sup>は、Marx の方法における變化を、1863年代の再生産表式の發見にもとめ、それによって『批判』における素材的觀點が『資本』における認識の觀點に變化し、そして、その變化が『批判』のプランと『資本』の構成とのちがひとなつてなかにあらわれていると結論している。

Morf はこれにたいして、いままで述べたところから、第一に、Marx の研究對象はなによりもまず、資本主義社會の運動法則であつたこと。そしてそのことは『批判』はもちろん、『批判』以前に書かれた『草稿』においても明らかであること。そして第二に、『批判』においても方法論的に、『資本』が出發點であり到着點であつたこと。第三に、『批判』においても社會的再生産の視角がとられていたこと、そして Marx の方法が首尾一貫して、資本家的生産關係の背後にある人的關係を明らかにすることにむけられていたことをもつてその批判にこたえている (Morf: S. 76—78)。

Berens は Grossmann にたいする Morf の批判とほぼ軌を一にしなから、しかもなお『批判』と『資本』とのあいだに方法的轉換があつたとする。すなわち、Berens は、この變更の動機を、1861年から1863年までにわたるマルクスの『古典派ブルジョア經濟學にたいする再度の批判的檢討』すなわちスミスおよびリカードの體系の批判のうちに求めている。これによって、『むしろ外面的視點から出發し、またむしろ從來の經濟學の傳統的編別を繼承』(Berens S. 33.) していた最初のプランから、『嚴密に科學的・方法論的視點——かれにしたがえば科學的經濟學にとっての唯一の方法である論理と歴史との統一——にしたがつての構成』(Berens: S. 33) された『資本』プランへの變更を明らかにできるとするが、プランを方法との統一において明らかにした Morf の立場からみれば、その立論は力を失うであろう。

また Morf のこの見地は、Hammacher への反批判

9) Grossmann, Henryk: "Die Änderungen des ursprünglichen Aufbauplans des Marx'schen «Kapitals» und ihre Ursachen," in *Arch. f. d. Gesch. d. Sozialismus. u. d. Arbeiterbewegung*. 14. Jg. Leipzig 1929.

を可能にする。Hammacherの批判は『マルクスが57年に提案した経験的方法は、かれの形而上學的な・ヘーゲルによって規定された魂に(やぶれた)。かれはソクラテスからプラトンに至る道をくりかえしている。一般的なもののみが認識の出発点であり、対象であるという考えから、かれのなかで、この一般的なもののみが眞の現實性、內的合法則性であるというちがった考えになった』(Hammacher: *Das philosophisch-ökonomische System des Marxismus*. Leipzig 1909. S. 289.) というのである。すなわち、Marxの方法は経験から思辨へと移行している、と。これは『序説』における抽象的・論理的範疇への誤解をふくんでいる。『序説』における論理的範疇を、實在的・現實的範疇として規定したわれわれには、いまこれにたいして反批判を必要としないであろう。われわれはただ一般的な範疇は、特殊な内容において一般的な範疇であり、それが生ずる現實的な地盤をもっていること、一般的なものが具體的なものなかに貫徹していること、そのように一般的なものが實在的・一般的なものとなったとき、はじめて経済学の認識が可能となったことをつけ加えておけばよいであろう。

われわれは Morf にしたがって『手稿』の分析においては、疎外され・物化された形態における對象化は現實諸關係の顛倒をひきおこすことを明らかにした。そこでは人間的諸關係が物の關係としてあらわれる。その物的假象が特殊なこの疎外された様式であらわれるところの現實であるということに注意せずに、完全な現實であると考えるところに古典學派の誤りがあった。これに反して、Marx 経済学の方法の特徴は、これを特殊な主體・客體關係として認識するところにある。『認識過程の特徴はつぎのことのなかに、個々人の活動は主體的活動の外部に横わる事實、すなわち外的・客觀的現實としての現實像を意識的にとらえるという状況のなかでおこなわれるのでなく、この現實がわれわれにあらわれる特殊な媒介のなかではおこなわれるところにある。……過程を媒介する諸分枝を、——そのなかでこの過程がわれわれにあらわれるのだが——社會的歴史的に生成した主體・客體の關係によって規定することである。……過程の精神的再生産が社會的・歴史的實質の特殊形態であるところの、この形態は、形式と内容とが過程の統一にむかうばあいには經驗論と合理論とを二つの傾向として、すなわちこの統一にむかう過程の、二つの側面として内包する』(Morf: S. 87)。すなわち、このような立場は、物的關係としてあらわれる主體・客體關係を主體の側に還

元してみる立場である。Morf と同じ方向にあると思われる Bekker は、この點では、さらに進んで『草稿』と『資本』との方法的連續性を一層明確にしているように思われる。『手稿における私有財産は交換價値の擔い手たる物、商品となる。だがこの物の關係が人間活動の固有の内容となることによって、また、労働者がただ労働力、商品と考えられることによって、商品という範疇は、抽象的労働と同様に基礎的な意義を獲得する。『手稿』においては現象に對立する本質が發展せしめられた。すなわち疎外された労働において否定的に把握されたものが、商品において肯定的に把握されている。商品は現象であり、疎外された労働は本質である。』そしてこのように商品の分析からはじまる『資本』の體系は、同時に、この疎外された労働の背後に眞に人間の本質を回復する道を明らかにする。(Bekker S. 84)

このようにみてくれば、Marx 経済学における法則が歴史的な法則であることは明らかであろう。すなわち『具體的現實の内容の一般形態は、一般性それ自體が、歴史的なそれであるときの、すなわち一般的なものが過程の全體のなかで現實的に生成してくるときの法則にすぎない。同じように、發展せる價値形態と價値法則とは、生産者の労働諸條件からの分離、普遍的範疇としての労働の外延的また内包的擴大、すなわち労働が一般的・抽象的人間労働としてあらわれるところの形態を前提する資本主義的生産關係の典型的特徴である。したがって法則は、主體的・客體的關係が歴史的にあらわれてくるところの特殊形態をふくんでいる。』『法則とは特殊・歴史的の内容の一般的運動であり、それが妥當するところの諸前提は、過程の現實的諸前提それ自體である』(Morf. S. 86) と同時に、主體はこれを經驗として自覺する。したがって『資本』における理論と歴史の相互關連を Morf とともに『「資本」の歴史的展開と經濟史的例證とは、理論部分へ勝手につけ加えられたものではなく、抽象的敘述を具體化した反面である』(Morf: S. 107.) とみることができよう。

Morf はこれまでの過程を總括して『Schumpeter および他の人たちによって思辨的なものとして示された辯證法的方法は、Marx の全著作をその分析においても、その成果においても規定している。しかもそれは Hegel 辯證法の一面的な承繼の形態においてではなく、思惟と存在との二元論を揚棄した唯物辯證法の形態である』(Morf: S. 91.) と結んでいる。